

田野町文化財調査報告書第17集

なが 藪 遺 跡

県営農地保全整備事業七野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

## 序

田野町では、各地で農地保全整備事業等が行われてきました。また、これらに伴い多くの遺跡が発見されましたが、その一方で消滅する数も徐々に増加しつつあります。教育委員会では協議を重ね、できる限り現状のまま保存できるよう努力しているところでありますが、工事の設計上やむをえず消滅する部分については発掘調査による記録保存の措置をとっております。

本書で報告いたします『長藪遺跡』は七野地区県営農地保全整備事業に伴い実施しました発掘調査の記録であります。

調査の結果、旧石器時代と縄文時代早期～前期の石器や土器のほか、土坑などの遺構が多数確認されました。

本書の刊行を機に、皆様の文化財保護に対する認識を一層深めていただければと願うものであります。

平成6年3月31日

田野町教育委員会

教育長 鍋 倉 政 信

## 例 言

1. 本書は、昭和63年度田野町七野地区県営農地保全整備事業に伴い実施した、長截遺跡の発掘調査結果を報告するものである。

2. 調査は、国庫の補助並びに宮崎県中部農林振興局の委託を受け、次の体制で行った。

調査主体 田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会

教 育 長 種子田榮幸（昭和63年度）

教 育 長 鍋倉 政信（平成5年度）

社会教育課長 川口 昭七（昭和63年度）

前田 久育（平成5年度）

同補佐兼係長 新坂 政光（昭和63年度）

長友 啓泰（平成5年度）

同 主任主事 後藤 哲夫（昭和63年度調査事務担当）

同 主 査 長友カツ子（平成5年度調査事務担当）

同 主任主事 森田 浩史（調査担当）

調査指導 宮崎県教育庁 文化課

3. 発掘調査には作業員として多くの町民の参加を得た。

室内における遺物整理・報告書作成作業には [ ] (以上昭和63年度)

[ ] (以上平成5年度) らの補助を得た。

4. 本書の執筆・編集は主に森田が担当したが、土壌調査については宮崎県総合農業試験場の有村玄洋氏より原稿を賜った。

5. 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

6. 本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の『標準土色帳』による。

7. 本書に用いた略号（SK）は土坑を示す。

## 本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 検出遺構	6
第3節 出土遺物	17
第4節 田野町長敷遺跡土壌調査	27
第5節 SK15中の全磷酸含量	31
第Ⅲ章 まとめ	33

## 挿図目次

第1図 町内遺跡分布図	3
第2図 調査区周辺地形図	4
第3図 基本土層柱状図	5
第4図 調査区概要図	9
第5図 遺構実測図 (SK01~07)	11
第6図 遺構実測図 (SK08~14)	12
第7図 遺構実測図 (SK15~21)	13
第8図 遺構実測図 (SK22~26)	14
第9図 遺構実測図 (SK27・29~32)	15
第10図 遺構実測図 (SK28・34)	16
第11図 遺物実測図 (縄文時代早期の土器)	19
第12図 遺物実測図 (縄文時代前期の土器)	20
第13図 遺物実測図 (縄文時代の石器)	21
第14図 遺物実測図 (縄文時代の石器)	22
第15図 遺物実測図 (縄文時代の石器)	23
第16図 遺物実測図 (縄文時代の石器)	24

第17図	遺物実測図（縄文時代の石器）	25
第18図	遺物実測図（A区トレンチ第6層の遺物）	26

## 写 真 図 版

- PL01 A区全景・A区南側
- PL02 A区トレンチ・B区全景
- PL03 B区全景・C区全景
- PL04 SK01・03・04 検出状況、SK03 断面
- PL05 SK05・07・08 検出状況
- PL06 SK14・15・16・17 検出状況
- PL07 SK18・20 検出状況、SK20 断面
- PL08 SK19・21 検出状況、SK21 断面
- PL09 SK24・27 検出状況、SK27 断面
- PL10 SK26・28・29 検出状況
- PL11 SK30・32 検出状況、A区トレンチ遺物出土状況
- PL12 A区トレンチ遺物出土状況、B区焼燼等出土状況
- PL13 縄文時代早期・前期の出土遺物（土器）
- PL14 縄文時代の石器（石鏃ほか）
- PL15 縄文時代の石器（石斧ほか）
- PL16 縄文時代の石器（石皿）
- PL17 縄文時代の石器（石皿）
- PL18 A区トレンチ第6層の出土遺物

# 第I章 序 説

## 第1節 発掘調査に至る経緯

田野町七野地区では、昭和61年度から県営特殊農地保全整備事業が実施されている。それに先立ち、教育委員会では事業予定区内における埋蔵文化財の試掘調査を実施し、その結果、各所に遺物の散布地を確認した。昭和61年度・62年度は県文化課の派遣を得て丸野第2遺跡の発掘調査を実施した。昭和63年度も遺跡の所在を確認している通称長藪が工事区域にかかったため、その現状保存等について宮崎県中部農林振興局と再三にわたり協議を行った。しかし、その一部においては設計上現状保存が不可能であることから発掘調査による記録保存の措置をとることで合意した。63年3月には地元との協議も終え、昭和63年5月1日付けで委託契約を締結し、同年5月11日から発掘調査に着手した。

調査にあたっては七野地区住民の皆様、中部農林振興局並びに関係諸機関の方々には並々ならぬご理解とご協力を賜りましたこと、ここに記して感謝申し上げたい。

## 第2節 遺跡の位置と環境

田野町は宮崎市の南西約20kmの田野盆地を中心として、東西・南北に約14km、総面積は109.01km<sup>2</sup>に至る。南方には標高1,118mの鶴塚山があり「イワザクラ」「マツゲカヤラン」「ケクスアゲ」「ナヨテンマ」「ヒュウガヒロハテンナンショウ」などの稀少な植物が自生する。また町内の各地で貝類・カニ・ウニをはじめ「オバキュリナ」等の海洋生物の化石が採集され、『日向地誌』には「田野村の化石溪」として記載されている。

七野地区は町の北西部の南方に延びる台地上にあり、長藪遺跡をはじめ丸野第1・第2遺跡、七野第1・第2・第3遺跡が所在する。更に北に松山川を隔てて八重地区の遺跡群と南に片井野・元野地区の遺跡群、西ノ原遺跡、井出ノ尾遺跡などの多数の遺跡がある。

昭和61年度・62年度に発掘調査された丸野第2遺跡では、縄文時代早期～後期・弥生時代後期の遺構遺物が確認されており、中でも縄文時代後期は竪穴住居跡が検出されている。

これに対し、西北西に位置する長藪遺跡は旧石器時代～縄文時代早期・前期に限られており、若干性格が異なる。

〔参考文献及び町教育委員会刊行調査報告書〕

- 「芳ヶ迫第1遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第1集 1984
- 「芳ヶ迫第2・第3遺跡・札ノ元遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第2集 1985
- 「芳ヶ迫第1・第2・第3遺跡・札ノ元遺跡」田野町文化財調査報告書 第3集 1986
- 「丸野第2遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第4集 1987
- 「丸野第2遺跡概要 2次調査」田野町文化財調査報告書 第5集 1988
- 「長藪遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第6集 1989
- 「八重地区遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第7集 1989
- 「合子ヶ谷遺跡」田野町文化財調査報告書 第8集 1989
- 「八重地区遺跡 前畑第1遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第9集 1990
- 「田野町内遺跡詳細分布調査報告書」田野町文化財調査報告書 第10集 1990
- 「田野町の文化財Q & A」 1990
- 「丸野第2遺跡」田野町文化財調査報告書第11集 1990
- 「八重地区遺跡 前畑第1・砂田遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第12集 1991
- 「二ツ山第1遺跡」田野町文化財調査報告書 第13集 1992
- 「井手ノ尾遺跡」田野町文化財調査報告書 第14集 1992
- 「二ツ山第2遺跡」田野町文化財調査報告書 第15集 1992
- 「元野地区遺跡 本野・高野原遺跡概要」田野町文化財調査報告書第16集 1993
- 「長藪遺跡」田野町文化財調査報告書 第17集 1994
- 「元野地区遺跡 高野原遺跡概要」田野町文化財調査報告書第18集 1994
- 「八重地区遺跡」田野町文化財調査報告書 第19集 1994
- 「田野町内遺跡発掘調査」田野町文化財調査報告書第20集 1994



第1図 町内連絡分布図

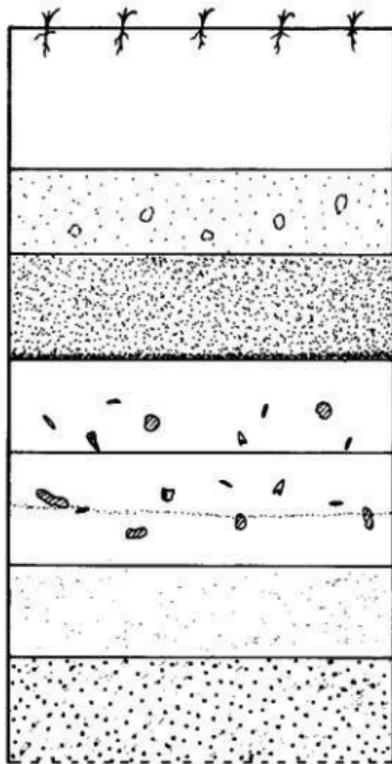


## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

調査は表土の置場、地形等から便宜的にA・B・Cの各区を設定して行った。A区は北西から南東にかけての標高約215m~212mのやや急な斜面を呈し、徐々にフラットになりながらB区・C区へと至る。現地形と旧地形の顕著な差異はみられなかった。調査面積はA区が2,900㎡、B区が4,600㎡、C区が1,000㎡の全体で約8,500㎡に至った。

層位は上層から〔第1層〕耕作土、〔第2層〕赤ホヤ火山灰二次堆積層、〔第3層〕赤ホヤ火山灰堆積層、〔第4層〕(黒褐色10YR3/1)土層、〔第5層〕(褐色7.5YR4/3・4/4)土層、〔第6層〕(褐色7.5YR4/3~10YR4/6)土層、〔第7層〕(黄褐色10YR5/8)土層を基本とする。第7層はATもしくはその風化層とみられる。A区東側及びB・C区ではこれらの層位がほぼ良好な状態で見られたが、A区中央から東側斜面にかけては自然流出のためか乱れが顕著であった。



第3図 基本土層柱状図

遺物は第2層から縄文時代早期~前期の土器等、第4・5層から早期の土器・石器、第6層から旧石器と思われるものが少量出土した。早期の遺構は散石程度で集石遺構・土坑等の明確なものは見られなかった。赤ホヤ堆積以降については土坑状の遺構が34基検出された。出土遺物・検出面・埋土等から、概ね前期以降のものとみられる。形状は不整形なものから楕円形・長方形のものまで様々である。

## 第2節 検出遺構

検出作業は第2層と第3層上面において行った。SK07の他は大半が第2層上面で確認したものである。

〔SK-01〕

110cm×50cmの長方形を呈し、深さは検出面から約52cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。

〔SK-02〕

73cm×65cmの形状は不明、深さは検出面から約50cm。

〔SK-03〕

-×87cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約48cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。

〔SK-04〕

158cm×107cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約37cm。

〔SK-05〕

128cm×70cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約51cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-06〕

116cm×58cmのやや崩れた長方形を呈し、深さは検出面から約18cm。

〔SK-07〕

238cm×168cmのやや崩れた楕円形を呈し、深さは検出面から約32cm。

〔SK-08〕

167cm×45cmのやや崩れた長方形を呈し、深さは検出面から約70cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-09〕

210cm×140cmのやや崩れた楕円形を呈し、深さは検出面から約37cm。

〔SK-10〕

83cm×37cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約30cm。

〔SK-11〕

-×79cmの形状は不明、深さは検出面から約21cm。

〔SK-12〕

230cm×-の形状は不明、深さは検出面から約81cm。

〔SK-13〕

70cm×57cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約31cm。

〔SK-14〕

136cm×54cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約48cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-15〕

135cm×53cmのやや崩れた方形を呈し、深さは検出面から約62cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。

〔SK-16〕

175cm×72cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約59cm。埋土に御池ボラが少量見られた。土器片が1点出土した。

〔SK-17〕

120cm×70cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約62cm。埋土に御池ボラが少量見られた。土器片が1点・磨石が1点出土した。

〔SK-18〕

140cm×57cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約66cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。

〔SK-19〕

235cm×175cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約135cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-20〕

98cm×53cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約50cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。

〔SK-21〕

110cm×55cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約63cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。土器片が1点(17)出土した。

〔SK-22〕

104cm×77cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約34cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-23〕

110cm×85cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約36cm。

〔SK-24〕

132cm×56cmのほぼ楕円形を呈し、深さは検出面から約40cm。埋土に炭化物が少量見られた。土器片が1点出土した。

〔SK-25〕

153cm×92cmのやや崩れた楕円形を呈し、深さは検出面から約36cm。

〔SK-26〕

204cm×192cmのやや崩れた円形を呈し、深さは検出面から約148cm。埋土に御池ボラが少量見られた。土器片が1点(27)・黒曜石片が3点出土した。

〔SK-27〕

170cm×65cmのやや崩れた長方形を呈し、深さは検出面から約48cm。埋土に御池ボラが少量見られた。

〔SK-28〕

63cm×-の形状不明、深さは検出面から約46cm。

〔SK-29〕

160cm×78cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約76cm。埋土に御池ボラが少量見られた。土器片が2点出土した。土器片が1点出土した。

〔SK-30〕

136cm×58cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約36cm。埋土に御池ボラのみで構成される層が見られた。土器片が1点(22)出土した。

〔SK-31〕

188cm×57cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約50cm。土器片が3点(16・25・32)出土した。

〔SK-32〕

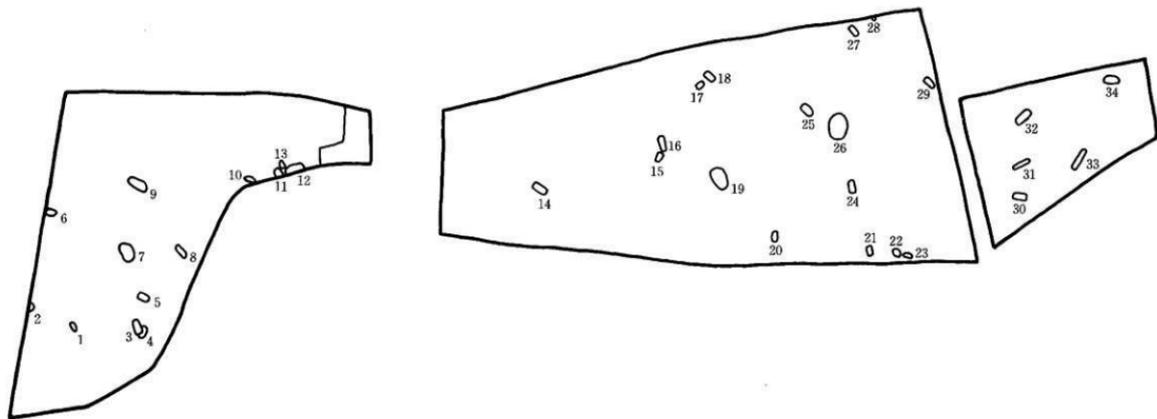
198cm×50cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約66cm。

〔SK-33〕

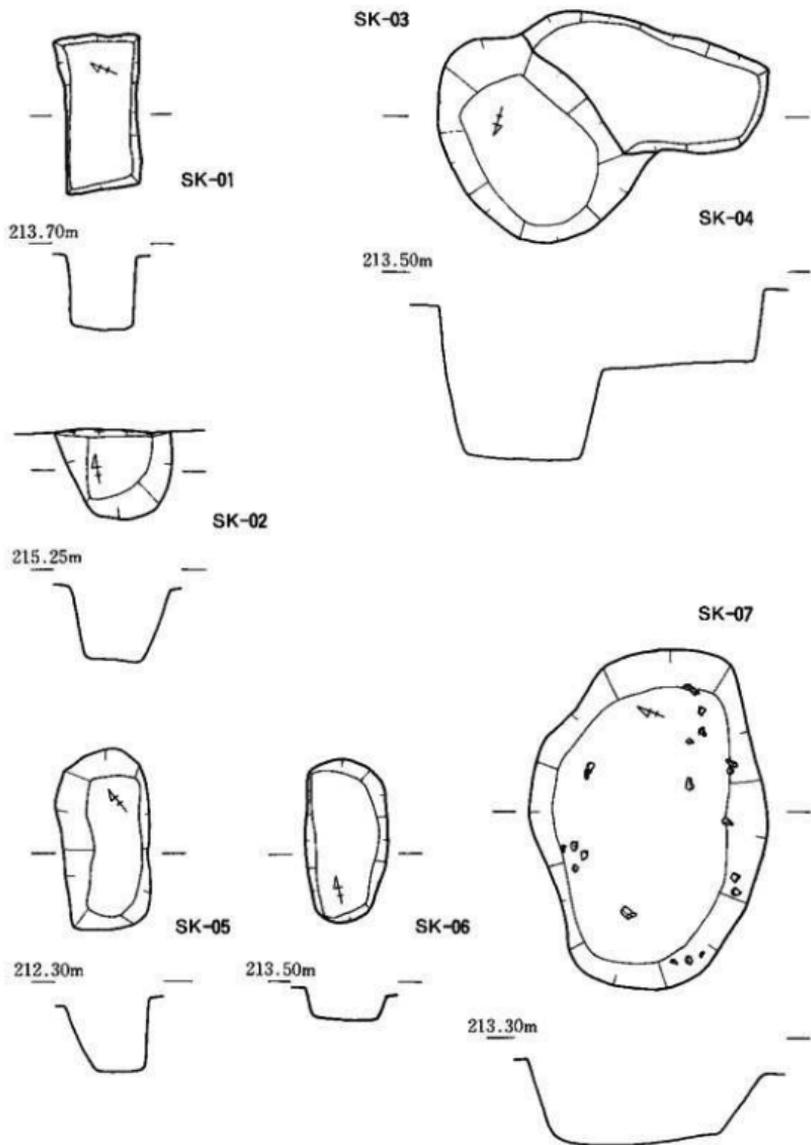
221cm×52cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約74cm。埋土に御池ボラが少量見られた。土器片が1点(18)出土した。

〔SK-34〕

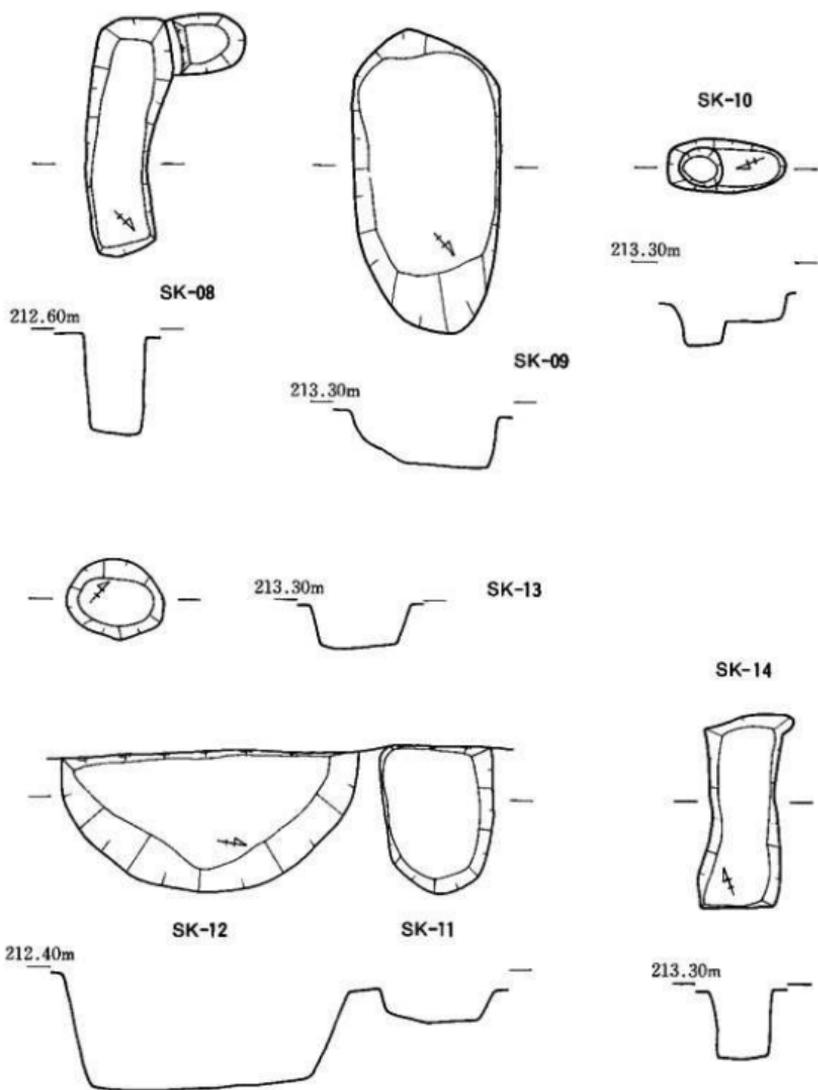
153cm×62cmのほぼ長方形を呈し、深さは検出面から約16cm。土器片が2点(14・30)出土した。



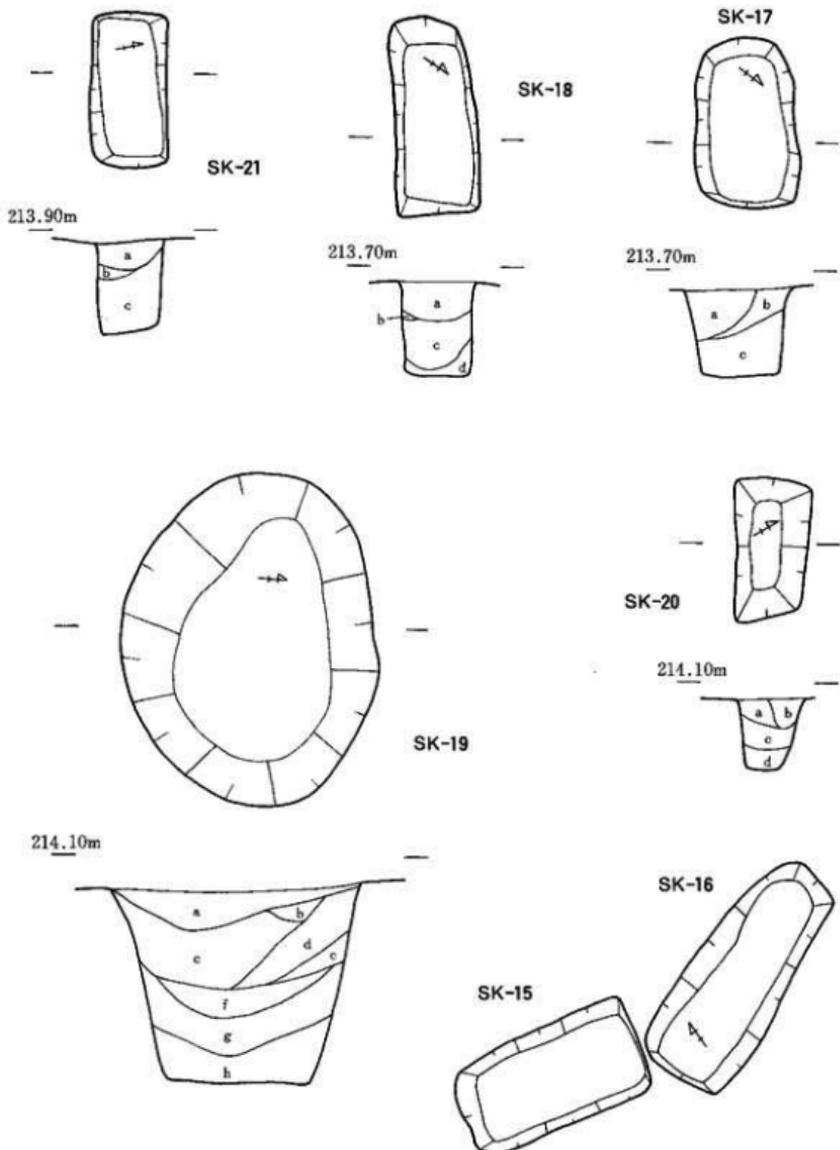
第4図 長藪遺跡調査区概要図 (S:1/400)



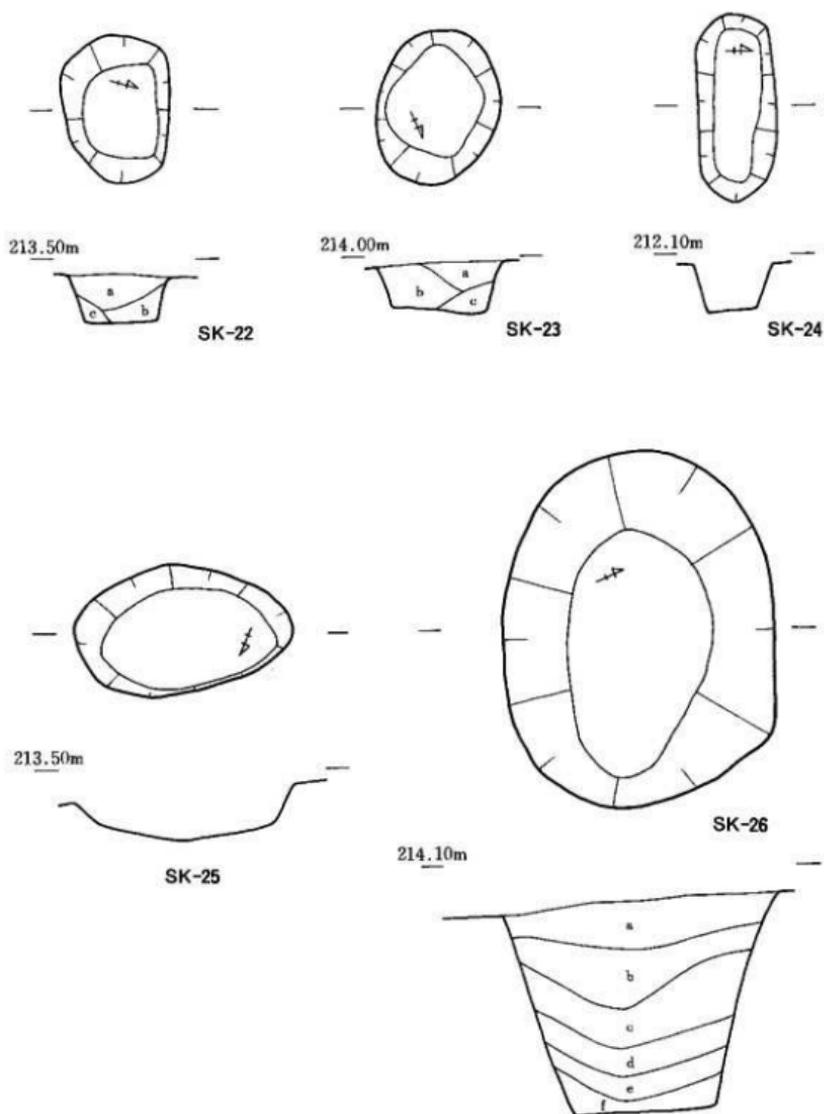
第5図 遺構実測図 (S:1/40)



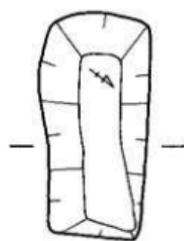
第6図 遺構実測図 (S:1/40)



第7図 遺構実測図 (S:1/40)

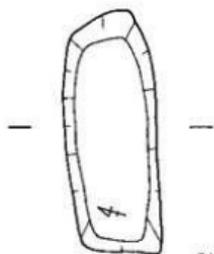
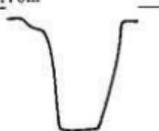


第8図 遺構実測図 (S:1/40)



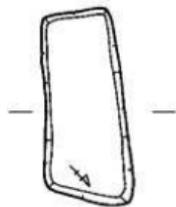
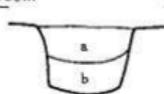
SK-29

213.70m



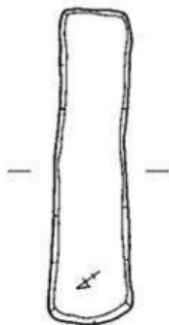
SK-27

213.60m



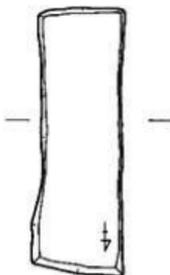
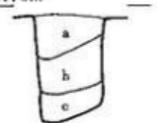
SK-30

214.00m



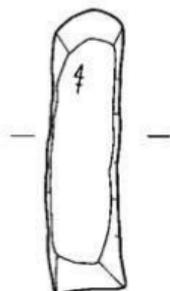
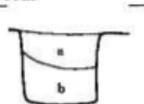
SK-33

213.70m



SK-31

214.00m

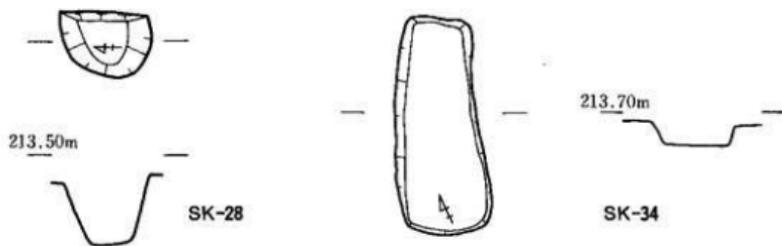


SK-32

214.60m



第9図 遺構実測図 (S:1/40)



第10図 遺構実測図 (S:1/40)

〔遺構断面の土色〕

- SK 17 (a)黒褐色3/2 (b)黄褐色5/6 ボラ少量混 (c)褐色4/6 ボラ少量混
- SK 18 (a)暗褐色4/3 ボラ少量混 (b)暗オリーブ褐色3/3 (c)御池ボラのみ層  
(d)褐色4/6 ボラ微量混
- SK 19 (a)黄褐色5/6 ボラ少量混 (b)黒褐色2/3 (c)にぶい黄褐色4/3  
(d)暗褐色3/3 (e)オリーブ褐色4/6 (f)明褐色5/8 (g)黄褐色5/8  
(h)褐色4/4
- SK 20 (a)黄褐色5/6 ボラ少量混 (b)オリーブ褐色4/6 (c)御池ボラのみ層  
(d)淡黄色4/8 ボラ混
- SK 21 (a)明黄褐色6/6 ボラ多量混 (b)褐灰色ブロック (c)御池ボラのみ層
- SK 22 (a)黄褐色5/6 ボラ少量混 (b)黄褐色5/8 ボラ微量混 (c)明黄褐色6/8
- SK 23 (a)暗褐色5/6 (b)褐色4/4 (c)黄褐色5/8
- SK 24 (a)暗褐色3/4 炭化物粒微量混
- SK 26 (a)黄褐色5/6 ボラ少量混 (b)褐色4/6 ボラ少量混 (c)黄褐色5/8  
(d)明赤褐色5/8 (e)橙6/8 (f)明褐色5/6
- SK 27 (a)暗褐色3/4 ボラ少量混 (b)灰褐色2/4
- SK 30 (a)御池ボラのみ層 (b)黄褐色5/8 ボラ微量混
- SK 31 (a)褐色4/6 (b)黄褐色5/8
- SK 33 (a)褐色4/6 ボラ少量混 (b)暗褐色4/8 (c)明赤褐色5/8
- SK 34 (a)褐色4/6

### 第3節 出土遺物

#### — 縄文時代早期の土器 — (1~12)

細片を含めて24点出土した。(8)は攪乱層、(4・5)は第2層、(1~3・6・7・9~12)は第4層、(7)は第5層上面からの出土である。これらは、条痕文土器(1~8)押型文土器(9~11)撚糸文土器(12)無文土器(13)に大別される。

条痕文は凡そ横方向に施すもの(2・3・6)と、不定方向に施すもの(1・4・5・7)とがある。(1・2・7)は内面にも条痕による調整が見られるが、他はナデにより仕上げる。(7)は横方向に細く粗雑な貼付突帯をめぐらす。

押型文(9・10・11)はいずれも山形文で、(9)は他に比べて施文がやや粗雑である。(11)は胎上中に雲母が微量見られる。

(12)は沈線で区画された中に撚糸文帯を施し、棒状工具による刺突文が見られるもので、塞ノ神式に相当するもの。

無文土器とした(13)は上げ底の底部で、やや荒いナデにより仕上げる。

#### — 縄文時代前期の上器 — (14~33)

すべて曾畑式土器で、細片を含めて30点出土した。(21・26・29)は第1層、(15・19・33)は第2層、(17)はSK21、(27)はSK26、(23)はSK28、(22)はSK30、(16・25・32)はSK31、(18)はSK33、(14・30)はSK34、(20・24・28・31)は攪乱層内からの出土である。

(14~16)は口縁部で、いずれも刺突文列を施す。(14)は棒状工具による刺突文列を2列、その直下に3条の横位平行沈線文と更に縦位の平行沈線文、内面に3条の横位平行沈線文を施し、ほぼ平らに仕上げる口唇部に連続押圧文をめぐらす。(15)は棒状工具による刺突文列を5列、その直下に横位平行沈線文、内面に6条の横位平行沈線文を施し、ほぼ平らに仕上げる口唇部に連続押圧文をめぐらす。(16)は刺突文列を2列その直下に横位平行沈線文、内面に横位の短沈線文が3条まで確認でき、更にその上から沈線文を山形に施文し、ほぼ平らに仕上げる口唇部には連続押圧文をめぐらす。部分的にはあるが先端が二又の施文工具を使用しており、(14・15)や他の体部とは異なる。

(17~33)は体部及び口縁部付近の破片で、いずれも平行沈線文が見られる。(17)は口縁部付近で刺突文列と、その直下に横位平行沈線文が見られる。(19・20)は平行沈線文の構成が比較的整然としたもの、他はやや崩れたものである。(18・22・26・27)は短沈線文を組み合わせるもの。以上の内面は、いずれもナデにより仕上げる。

— 石器 —

石鏃 (34~46)、石錐 (47~49)、石匙 (50)、剥片石器 (51・52・54~56)、石核 (53)、石斧 (57)、磨石 (60~62・66・67)、敲石 (58・59) 石皿 (64~65・68~71) の他、剥片等が出土した。(36・48・49・50~52・67) は第1・2層及び攪乱層からの出土であるが、他は第4・5層から出土した。

石鏃 (34~42) は全て凹基無茎鏃で、抉りの深いものからごく浅いものまでである。(43~46) は剥片鏃である。石材には黒曜石 (38・41) 姫島産黒曜石 (39・40・45) チャート (35・36・43・46) 等が見られる。

石錐 (47) は貞岩、(48・49) は黒曜石を石材とする。(47) は先端の片面のみ加工が見られる。(48) は先端を欠損している。

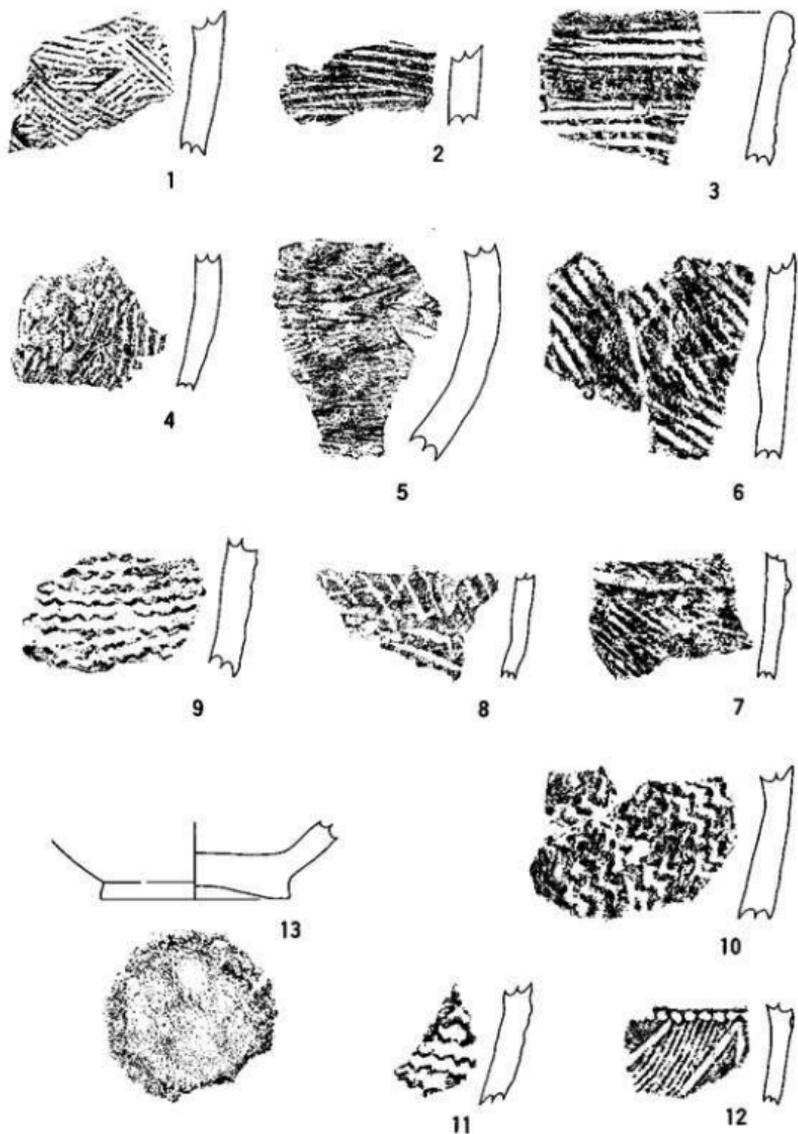
石匙 (50) はチャートを石材とする縦形のもので、約4分の1を欠損しているものとみられる。

剥片石器 (51) は一側辺に両側から二次加工するもので、チャートを石材とする。(52) は縦長剥片の片側を片面から二次加工するもので、姫島産黒曜石を石材とする。(54~56) はいずれも片面から二次加工するもので、(54・55) は硬質の貞岩を石材とする。

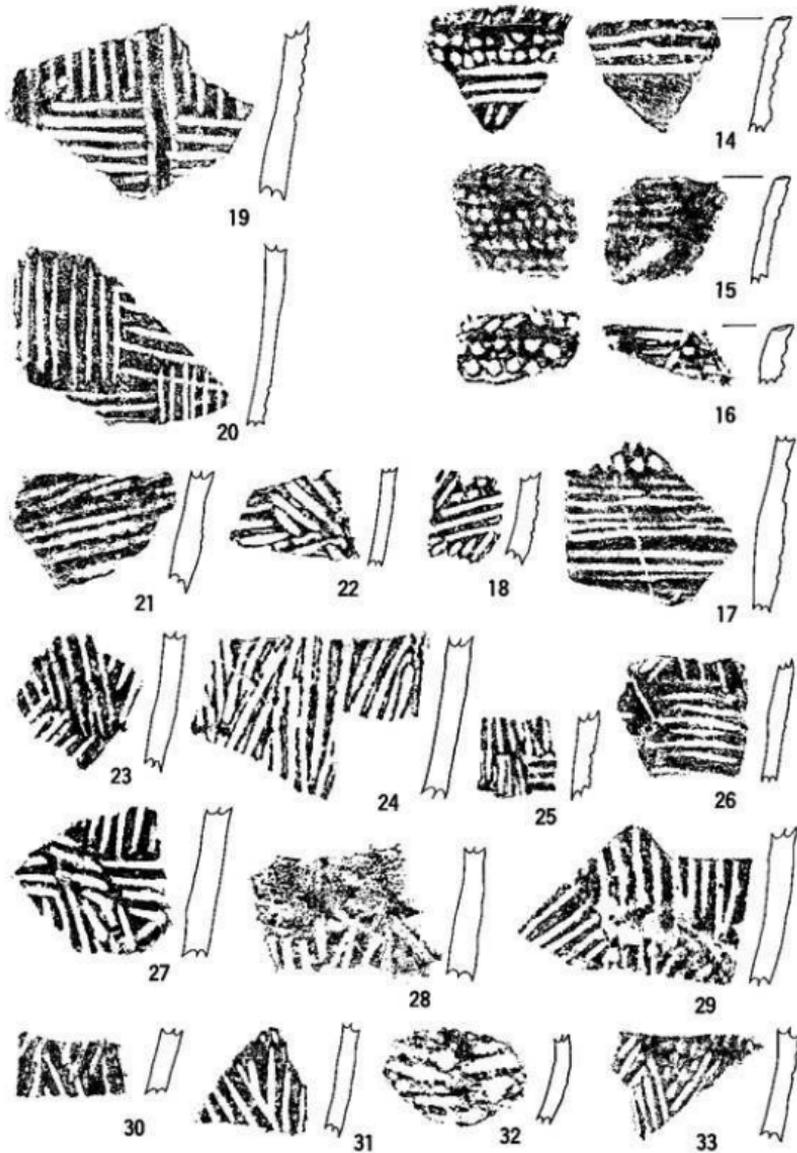
石斧 (57) は磨耗が著しく半分以上を欠損しているが、一部研磨の痕跡が見られる。磨石と石皿は大半 (61~63・67~71) が熱を受けて赤変しており、集石遺構等への二次的な利用があったものとみられる。

— A区トレンチの出土遺物 —

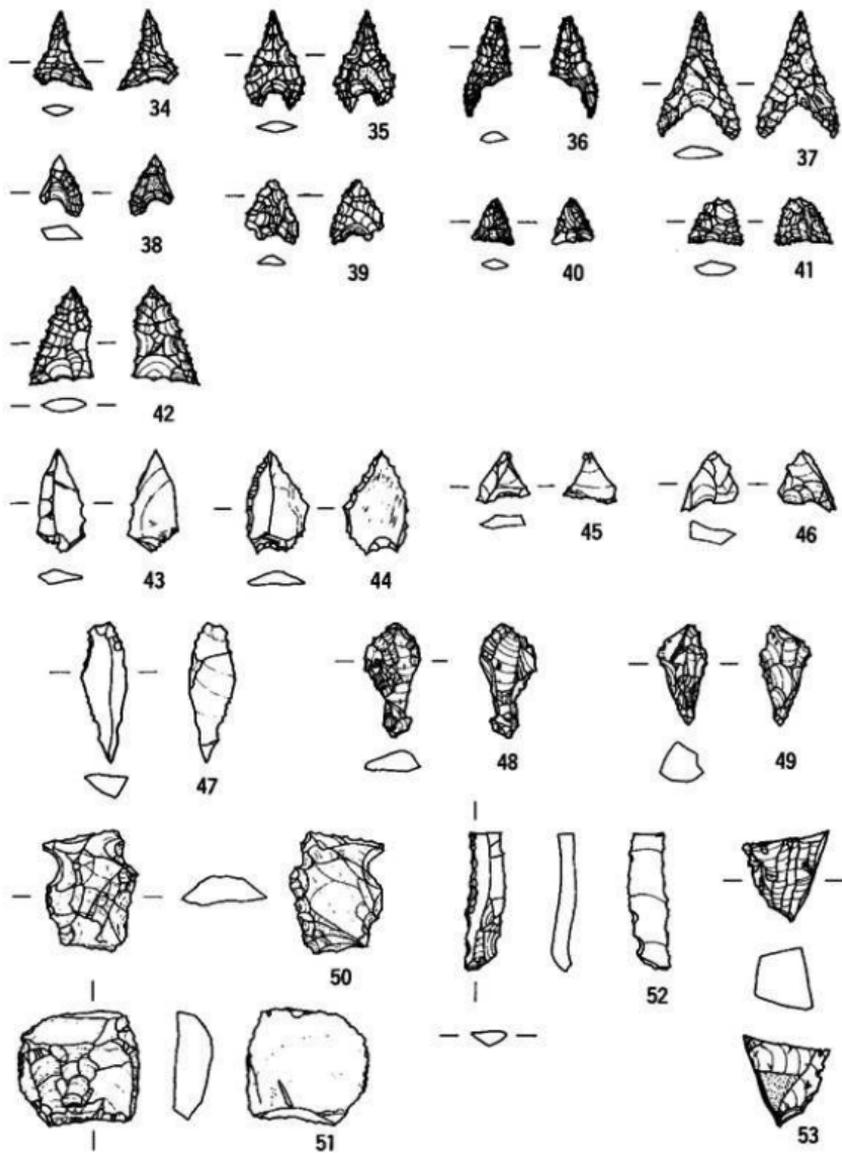
(72~87) は、いずれもA T火山灰堆積層の上層である第6層からの出土遺物である。石材を鑑定する機を得なかったが、黒曜石やチャートは全く見られなかった。(72~78) は二次加工が明瞭に観察できる。(87) は敲石で、先端に使用痕が見られる。



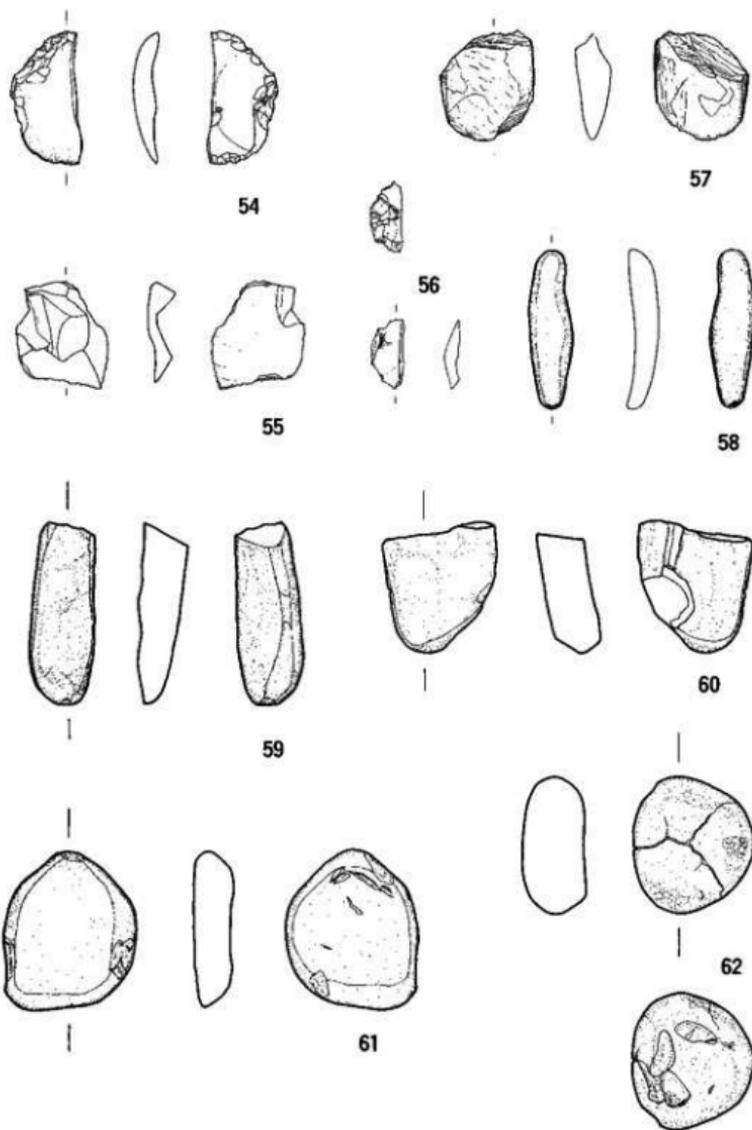
第11図 縄文時代早期の土器 (S:1/2)



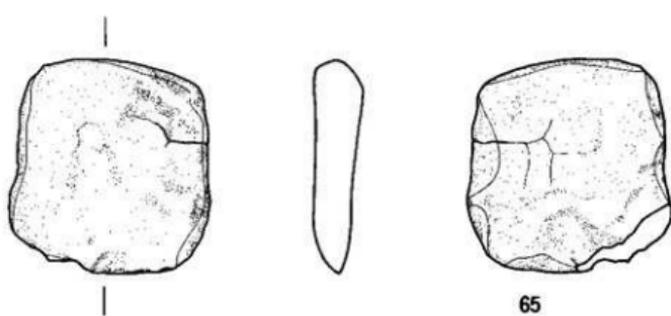
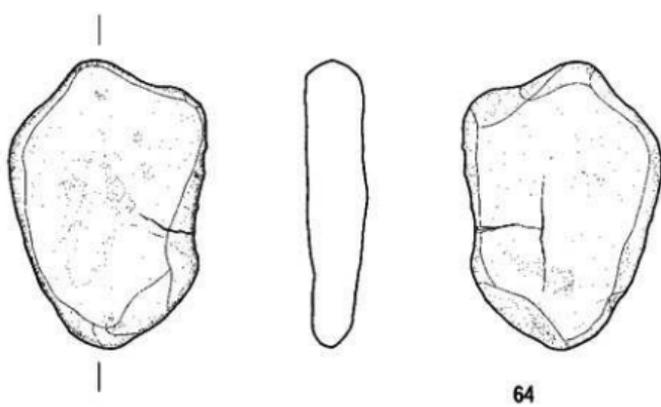
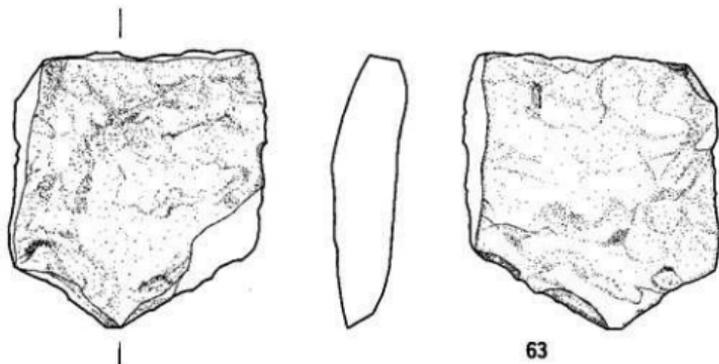
第12図 縄文時代前期の土器 (S:1/2)



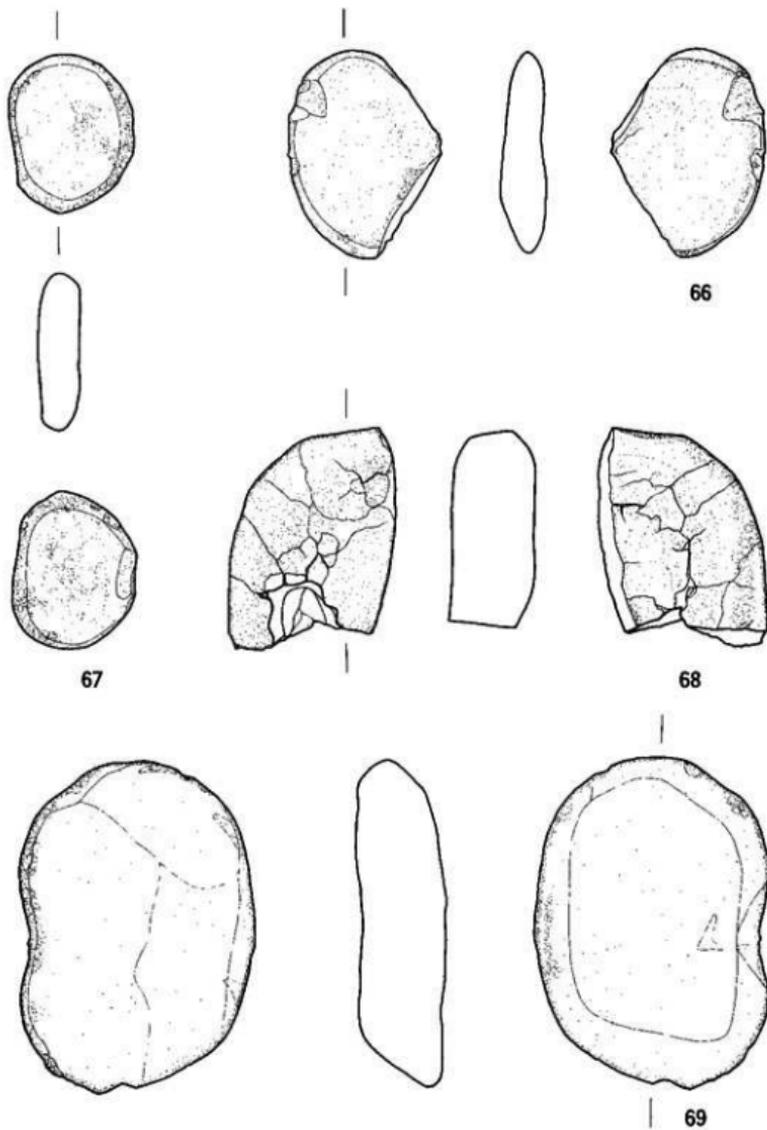
第13図 縄文時代の石器 (S:2/3)



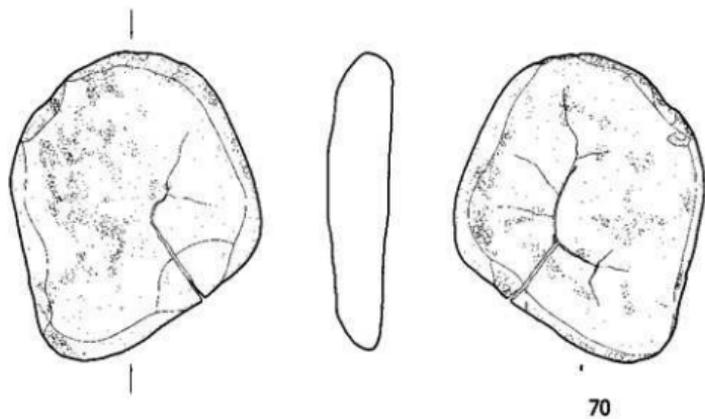
第14図 縄文時代の石器 (S:1/4)



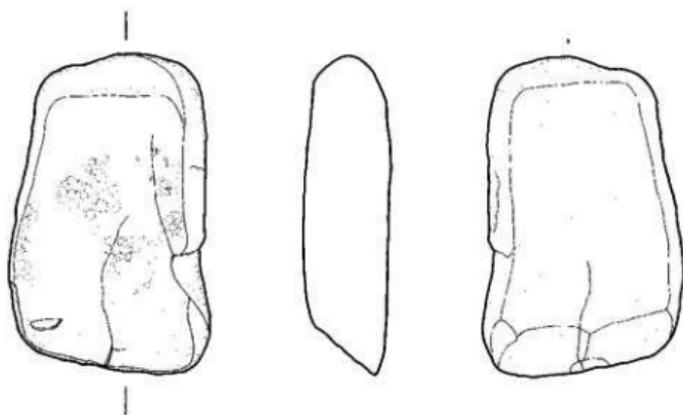
第15図 縄文時代の石器 (S:1/4)



第16図 縄文時代の石器 (S:1/4)

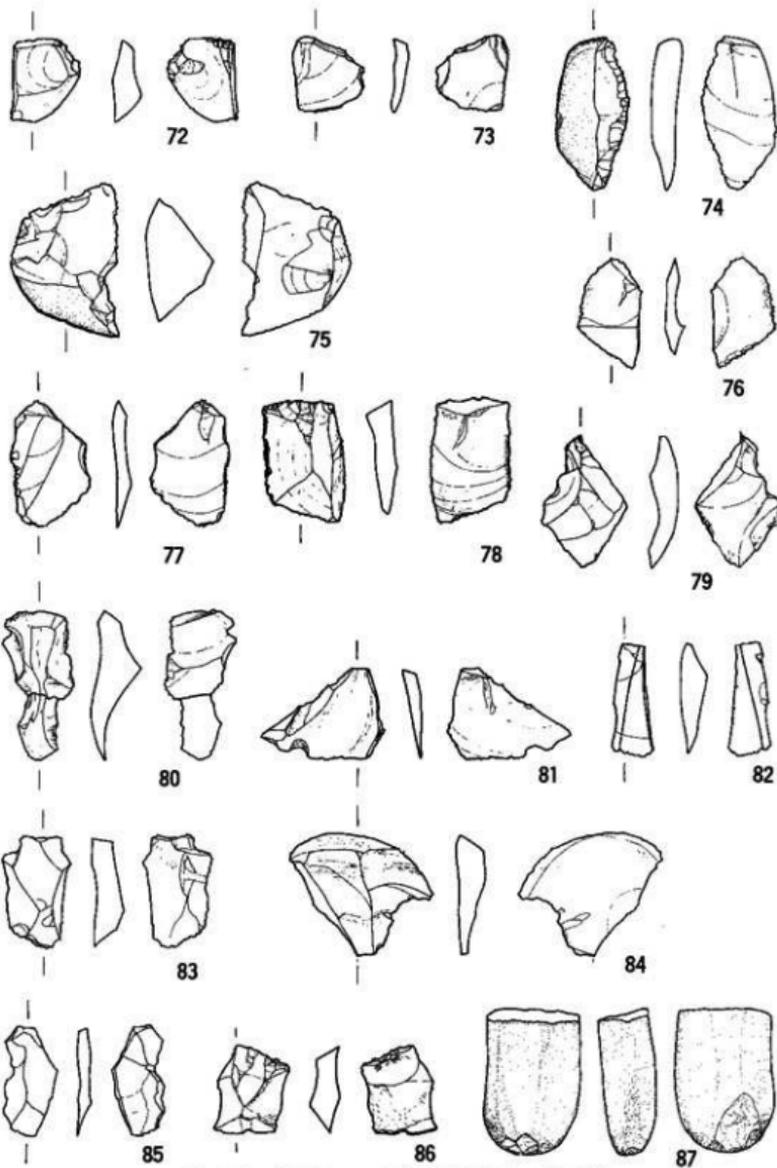


70



71

第17図 縄文時代の石器 (S:1/4)

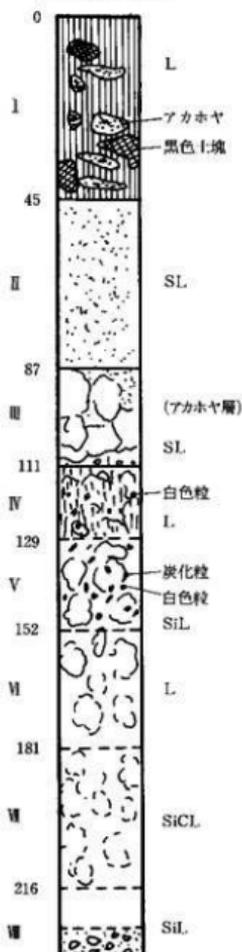


第18図 A区トレンチ第6層の遺物 (S:1/3)

#### 第4節 田野町長藪遺跡土壌調査

調査地点：長藪遺跡B区  
土 壤 群：黒ボク土造成相

##### 土壌断面記載



I 0～45cm, 黒褐 (75YR2/2) 色, 褐 (75YR4/4) 色および黄褐 (10YR5/5) 色の混色の壤土 (L)、人為的攪乱層で、黒ボク、黒ニガ、赤ホヤが混ざりあった層、腐植に富み、発達弱度の粒状構造、可塑性弱、粘着性弱、透水性中、植物根を含む。緻密度は18mm、層界は明瞭

II 45～87cm, 褐 (10YR4/6) 色の砂壤土 (SL)、腐植は極めて少なく、発達極弱度の粒状構造、火山ガラスに富み、ノコズ状を示し軽い、二次的堆積によるものと思われる。可塑性弱、粘着性弱、透水性中、緻密度は20mm、層界は明瞭

III 87～111cm, 明褐 (75YR5/8～75YR5/6) 色の砂壤土 (SL)、腐植は極めて少ない、発達弱度の塊状構造、アカホヤ層（風積性）で、火山ガラスに富み、ノコズ状を示し、軽い、可塑性弱、粘着性弱、透水性中、下部位（105～111 cm）に明褐色 (75YR6/8, 5/8) 色の風化した軽石小粒が存在する。緻密度は25mm、層界はやや明瞭

IV 111～129cm, 黄灰 (25Y4/1) 色、褐 (10YR4/3) 色の壤土 (L)、腐植を含み、発達中程度の塊状構造、カシワ盤でかたい、白色小粒（長石粒）が多く含まれる。可塑性中、粘着性中、透水性中、緻密度は25mm（やわらかい部分）～28mm（かたい部分）、層界は漸変

V 129～152cm, 褐 (75YR4/3, 4/4) 色の微砂質壤

土 (SiL)、腐植は少なく、発達弱度の塊状構造、細孔隙を含み、黒色の炭化粒や白色粒を含む、可塑性中、粘着性中、透水性中緻密度は22mm (やわらかい部分) ~ 26mm (かたい部分)、層界は漸変

VI 152~181cm, 褐 (75YR4/3~10YR4/6) 色の壤土 (L)、腐植は少ない、発達弱度の塊状構造、可塑性中、粘着性中、透水性中、緻密度は22mm (やわらかい部分) ~ 27mm (かたい部分)、層界は漸変

VII 181~216cm, 褐 (75YR4/4) 色の微砂質埴土 (SiCL)、腐植は少ない、発達極弱度の塊状構造、細孔隙に富む、可塑性中、粘着性中、透水性中、やわらかい、緻密度は20mm、層界は漸変

VIII 216~226cm, 褐 (75YR5/6) 色の微砂質埴土 (SiL)、腐植は殆どない、シラス風化物、火山ガラスに富み、未風化角礫が多い、発達極弱度の小粒状構造、可塑性弱、粘着性弱、透水性中、緻密度は19mm

## 土壌断面の記載に関する解説

1. 土 壌 群：断面形態の主な特徴および母材、分布する地形などについて共通点を持っている一連の土壌統をまとめて土壌群とする。
2. 土壌断面：断面にみられる土壌層位の配列は層位分化の原因となった土壌生成過程を反映している。
3. 土壌層位の区分：一般に土壌断面は上から順にA層、B層、C層などの3つの主層位から成立している。
  - (1) A 層：腐植で暗色に汚染され、有機物が無機物と結びついた腐植が多量に集積している層で、この層の質的特徴と形態的特徴 (土色、構造など) によって細分するときはA11、A12のように記す。また、補助記号として、p (作上層) で、plowing の略)、g (斑紋の存在) を用いて、水田の作土層はAp g、また、畑の作上層はApで示される。
  - (2) B 層：A層とC層の中間に位置し、母材の風化により生成された遊離鉄によって赤褐色、黄褐色を呈する風化層、あるいはA層から洗脱された物質の集積層で、構造が発達していることが多い。B1層はA層とB層の漸移層でB層の性質が優越している層である。形態的特徴 (土色、構造、土性など) により、B2層、B21層などに細分される。

- (3) C 層：風化作用を受けてもろくなっているが母岩の組織を残している。土壌化はほとんど進行せずは無構造、いくつかの層に区分されるときは上から順にC1、C2・・・のように細分する。
- (4) 埋没層：現在の土壌下に埋没した上層については現在の土壌をI A、I B、I C、埋没土をII A、II B、II C・・・以下III・・・IV・・・とする。
4. 野外土性の判定：土性は土壌断面の層位間の比較、風化の程度、異種母材の判定などの重要な目安となるので、現場で手ざわりや肉眼的観察によってだいたいの判定（野外土性という）を行う。（表1参照）

表1 野外土性判定の目安

判 定 法	土性名と略号
ほとんど砂ばかりで、ねばり気を全く感じない。	砂上 (S)
砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。	砂壤土 (SL)
ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。	壤土 (L)
砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。	シルト質壤土 (SiL)
わずかに砂を感じるが、かなりねばる。	埴壤土 (CL)
ほとんど砂を感じないで、よくねばる。	重埴土 (HC)

5. 土色の判定：土色を調べようとする層位のなかから、代表的な色調の部分から適当な大きさの土塊をとり、標準土色帖を使い、土壌の色と一致する色片をさがす土壌の色と一致する色片が決まったら色相、明度/彩度の順にならべ黒 (7.5YR 2/1) のように記載する。
6. ち 密 度：硬度計（山中硬度計）を用いて平滑に整えた土壌断面に対し、直角の方向に硬度計を押し当て、その円錐部のつばが土壌面に密着するまで、ゆっくり水平に保ちつつ押し込み、その貫入の深さを数値mmで読み、その平均値で示す。
7. 可塑性（表2）：可塑性とは、力を加えていくと変形し、力を除いたときその変形を保持する能力を表す。野外での判定は、土壌を親指と人差指の間でこ

ねて粒団を壊し、こねている間に水分が蒸発し、土が指に付着しないようになったときに棒状にこねのぼし、その状態を次の基準によって区分する。

表2 可塑性の区分基準（農林省，1961）

区 分	基 準
な し	全然棒状に延ばせないもの。
弱	辛うじて棒状になるが、すぐ切れてしまうもの。
中	直径2mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのにやや力を要するもの。
強	直径1mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのにやや力を要するもの。
極 強	長さ1cm以上の極めて細かい糸状に延ばせて、こね直すのにかなりの力を要するもの。

8. 粘着性（表3）：粘着性とは、土壤を親指と人差指の間で圧して引きはなすときの付着する性質をいっている。粘着性が最大になるまで水分を与え、親指と人差指との間の付着性の強弱によって次のように区分する。

表3 粘着性の区分基準（Soil Survey Staff, 1951）

区 分	基 準
な し	土壤が殆ど指に付着しない。
弱	土壤が一方の指に付着するが、他の指には付着しない。指をはなすと、のびない。
中	両指頭に付着する。指をはなすと、多少伸びる傾向をもつ。
強	指頭に強く付着する。指をはなすと伸びてくる。

（有村 玄洋）

## 第5節 SK15中の全磷酸( $T-P_2O_5$ )含量

1. 採土位置：各試料の採土位置は図4に示すとおりである。採土総点数は6点である。

### 2. 試料調整と分析法

1) 採土した土壌は風乾したのち、乳鉢内で粉碎し、2mmの円孔篩で篩別し、分析用試料とした。

### 2) 分析法

土壌pH：土壌1：水2.5の割合とし、ガラス電極法で測定した。

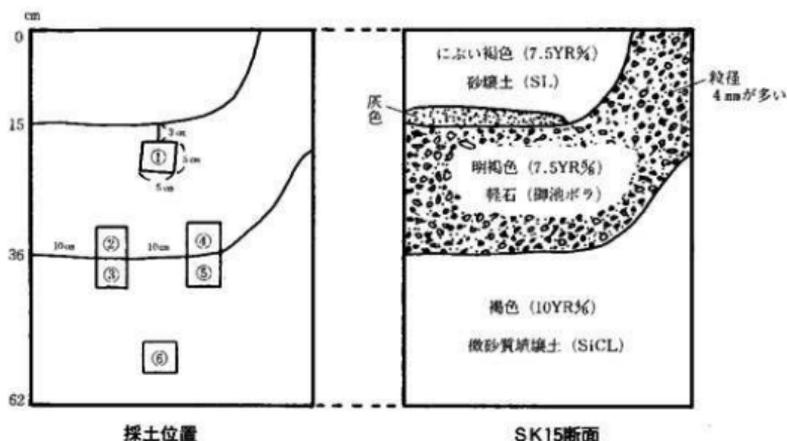
全磷酸( $T-P_2O_5$ )の定量：風乾土1gを300ml容トールビーカーにとり、硝酸-過塩素酸で分解後濾過水洗し、一定量とした。分解液をバナドモリブデン法により、比色した。

### 3) 分析結果

(1) pH(土壌酸度)：全体的にはほぼ6.3~6.4で、微酸性で採土位置間では差異は認められなかった。

(2) 全磷酸( $T-P_2O_5$ )含量の分布：No. 2, 4, 5(御池ボラと褐色火山灰土との境界付近)で約60~64mg/100gが多いが、そこより離れた位置(No. 1, 6, 3)では、51mg, 39mgおよび53mgで少なかった。しかし、これら6点の全磷酸量はえびの市蔵遺跡中のそれに比べてほぼ1/10程度できわめて少なかった。

(有村 玄洋・野中仙三郎)



採土位置およびSK15断面

表4 SK15中の全磷酸 (T-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 含量

(乾土当たり)

採 土 No.	pH (H <sub>2</sub> O)	全磷酸 (T-P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )
1	6.3	51.1
2	6.3	59.7
3	6.3	53.4
4	6.4	64.2
5	6.4	60.8
6	6.4	38.7

### 第三章 ま と め

長敷遺跡は調査の結果、旧石器時代と縄文時代早期・前期の遺跡であることを明らかにすることができた。

旧石器時代については、トレンチによる確認程度にとどまったが、田野町では発見例・調査例共に稀少な時代であり、遺跡の立地や当時の生活様式を考えるうえで貴重な発見であったことは言うまでもない。町内には他に、前平地区遺跡の札ノ元遺跡や芳ヶ迫第1・第3遺跡の他、萩ヶ瀬第2遺跡などがある。特に前平地区遺跡の調査例は、長敷遺跡と同様にAT堆積層（第2オレンジ層）より更に上層からの出土であり、今後遺物等の詳細な比較検討を行ってきたい。

縄文時代早期は、遺物包含層の確認と土器・石器の出土に加え焼礫の分布を確認することができた。土器・石器共に少量の出土であったが、土器片から見る限り岩木式や吉田式・前平式さらに桑ノ丸式等にあてはまる特徴は見られず、早期でも新しい段階を中心とするものと考えられる。また、この時代の遺跡に頻繁に見られる尾鈴山麓産火山性酸性岩類を石材とする磨石の出土は無く、これらの流通や移動経路を考えるうえで興味深い結果が得られた。遺物の出土状況や出土量から、早期における長敷遺跡は、まとまった集落ではなく、移動の過程で短時期に営まれたキャンプサイト的な性格のものとして捉えるのが妥当であろうが、このような様相を呈する遺跡の発見例は結構多く、拠点的な集落との関連を含めて、今後より深く考証していく必要がある。

縄文時代前期においては、包含層等を明確に発見することはできなかったが、曾畑式に相当する土器と、これらの出土する土坑を検出した。土坑の形状は円形・楕円形のものから長方形のものまで様々であったが、長方形の土坑の中に火山灰を敷き詰めた或いは堆積したものがあり、宮崎県総合農業試験場の有村玄洋先生にこの分析をお願いした。その結果、火山灰は御池軽石（ボラ）であることが確認された。火山灰と遺物の年代を考証していくうえで、貴重な資料となるであろう。また、土坑の形状から墓としての性格を考察する必要があると判断し、燐酸分析によりその含有量を測定して頂いた。含有量は他の遺跡の土坑墓における測定値の1/10とやや少なかったが、今後類例を調査する機を得て再度分析検討を行ってきたい。

#### — おわりに —

当遺跡の調査結果は同概要報告書でふれているが、当時の段階で土坑として報告した

ものについて今回、その検出状況・埋没土等を詳細に検討した結果、攪乱と判断したものがあり、本報告書において抹消していることを、ご周知いただきたい。

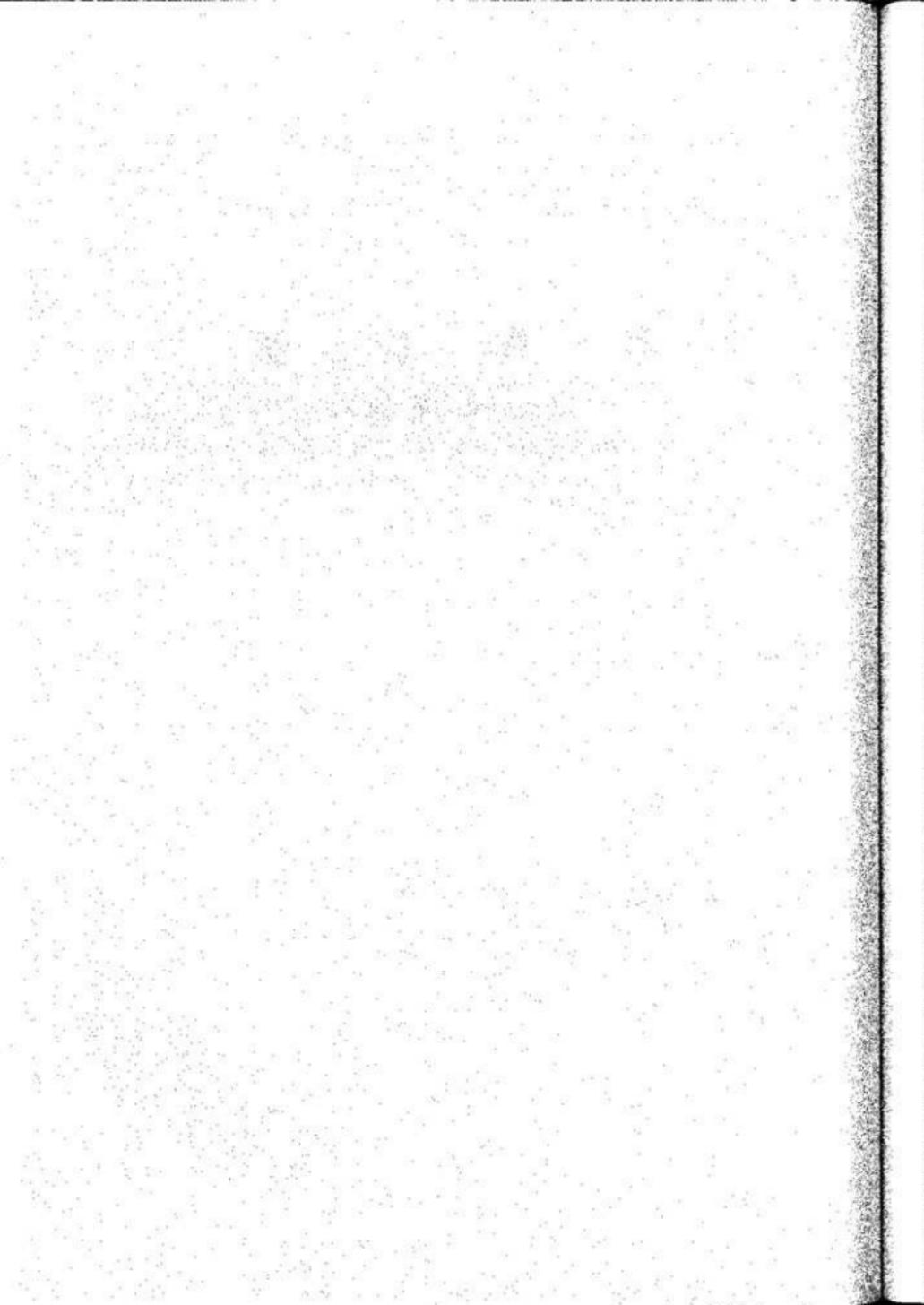
末尾になりましたが、宮崎県総合農業試験場の有村玄洋先生には、土壌分析・燐酸分析にご尽力を賜り、また貴重な原稿をいただきましたことを、ここに記して深く感謝申し上げます。

#### 〔参考文献〕

- 「芳ヶ道第1・第2・第3遺跡・札ノ元遺跡」田野町文化財調査報告書 第3集 1986
- 「長葎遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第6集 1989
- 「田野町内遺跡詳細分布調査報告書」田野町文化財調査報告書 第10集 1990
- 「天神河内第1遺跡」宮崎県教育委員会 1991

写 真 图 版

(長 藪 遺 跡)

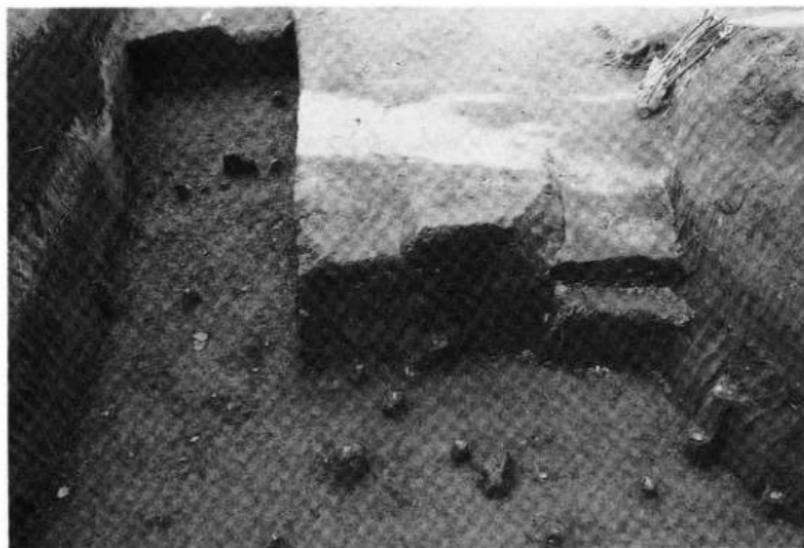




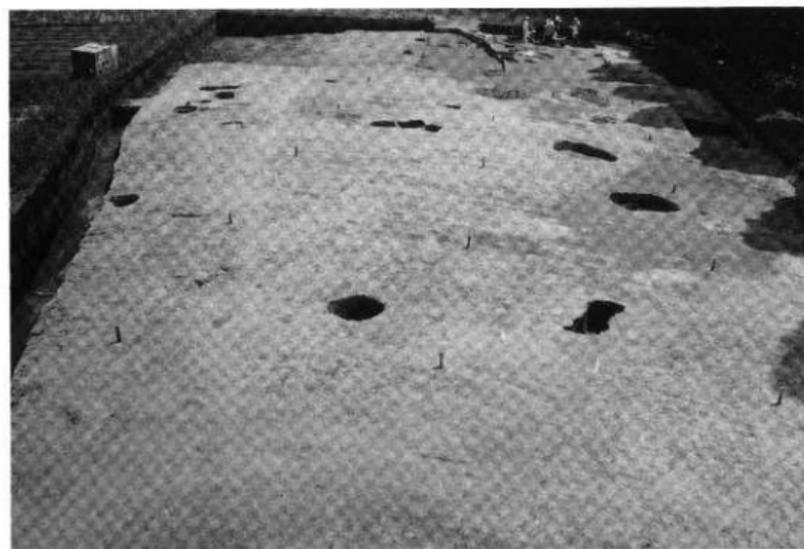
A区全景（東から）



A区南側（北から）



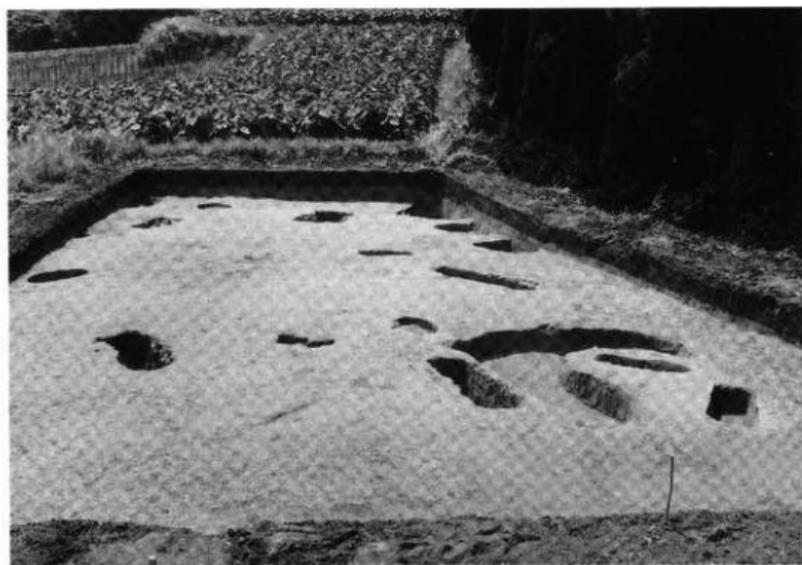
A区トレンチ (南から)



B区全景 (北から)

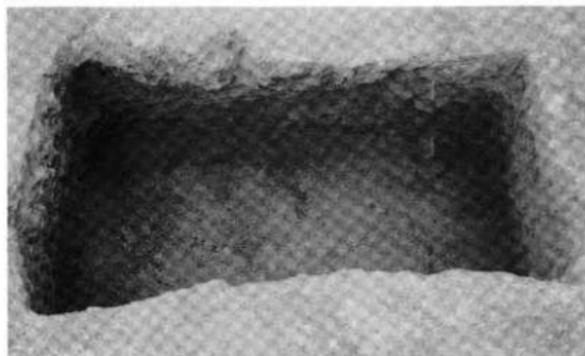


B区全景



C区全景

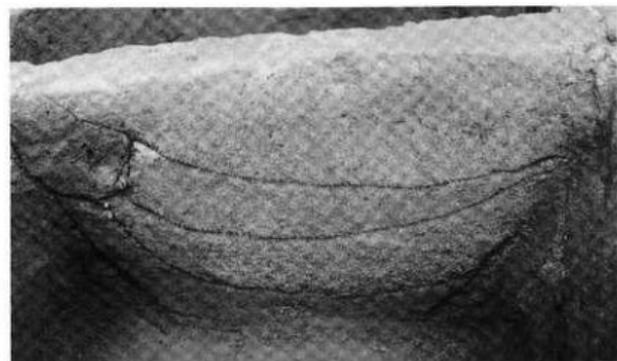
PL-4



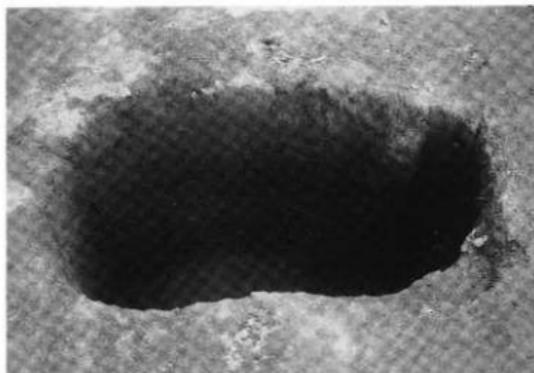
SK-01



SK-03-04



SK-03 (断面)



SK-05

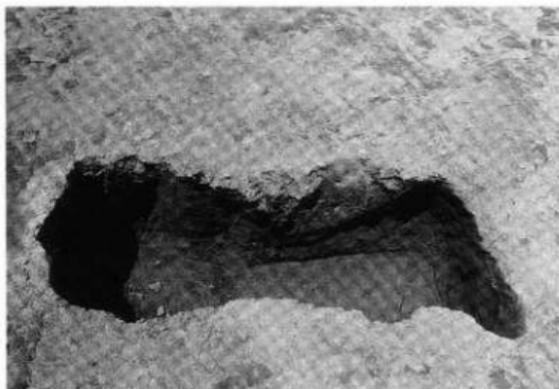


SK-07

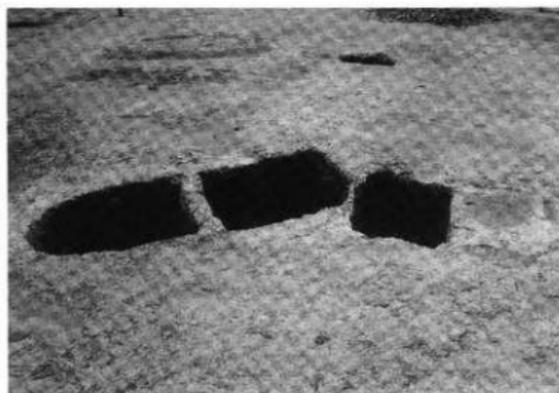


SK-08

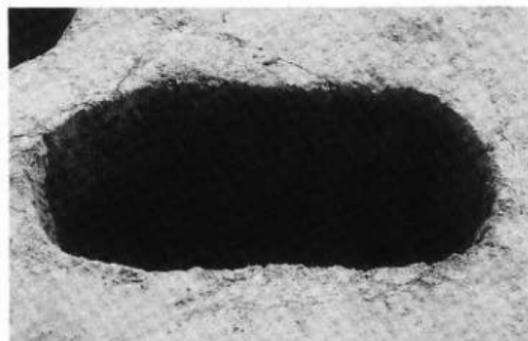
PL-6



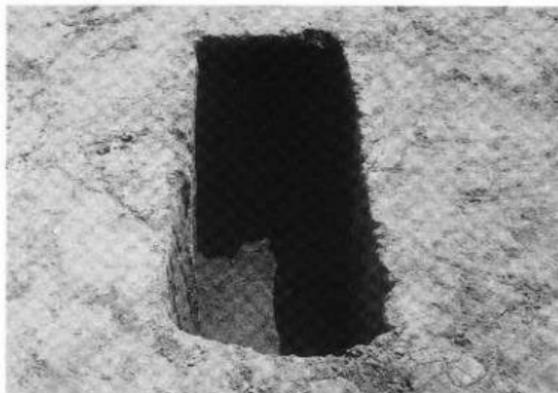
SK-14



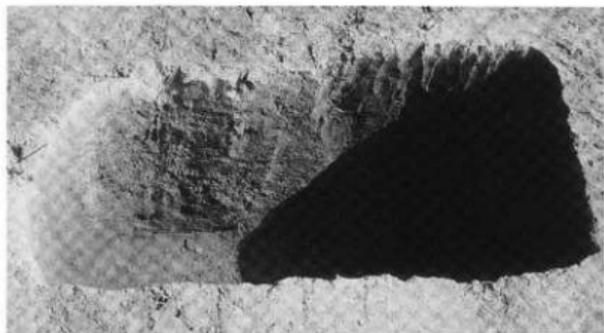
SK-15-16



SK-17



SK-18

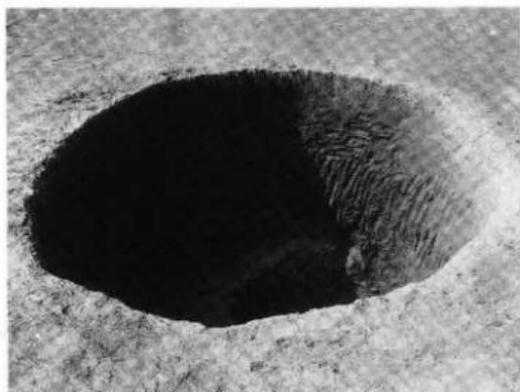


SK-20

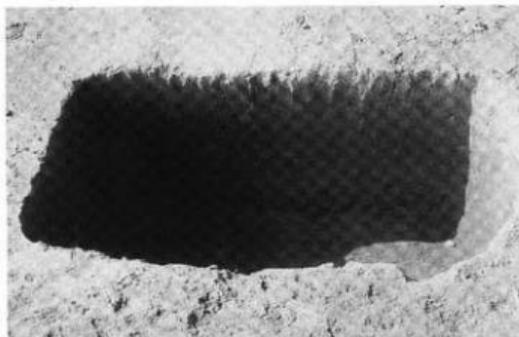


SK-20 (断面)

PL-8



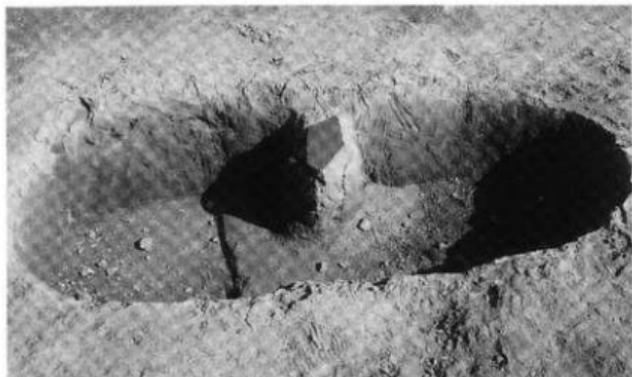
SK-19



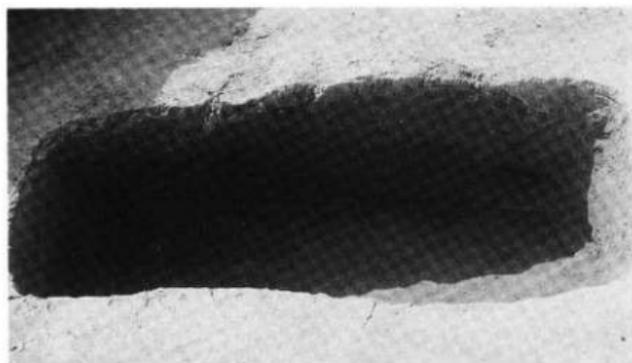
SK-21



SK-21 (断面)



SK-24

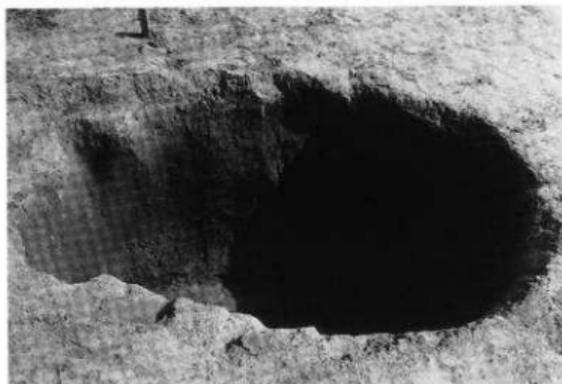


SK-27

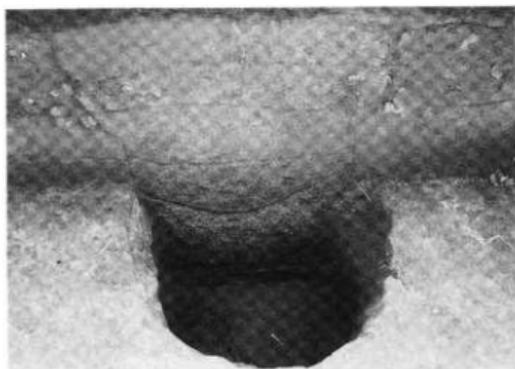


SK-27 (断面)

PL-10



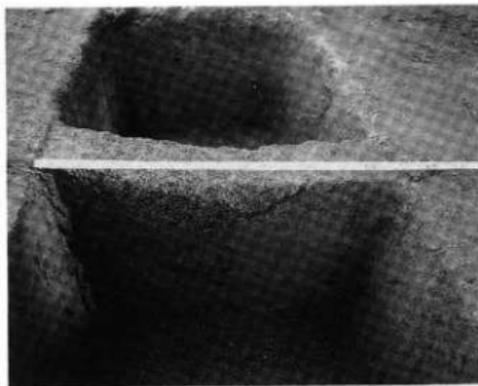
SK-26



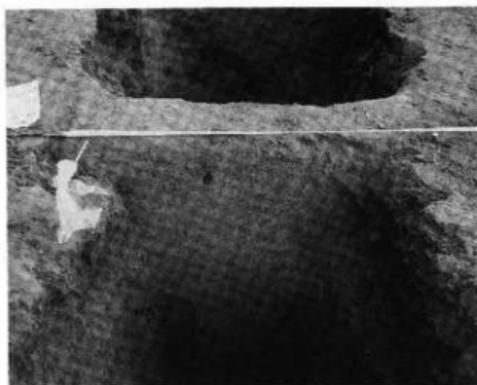
SK-28



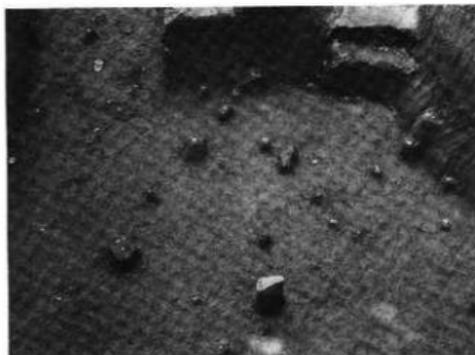
SK-29



SK-30

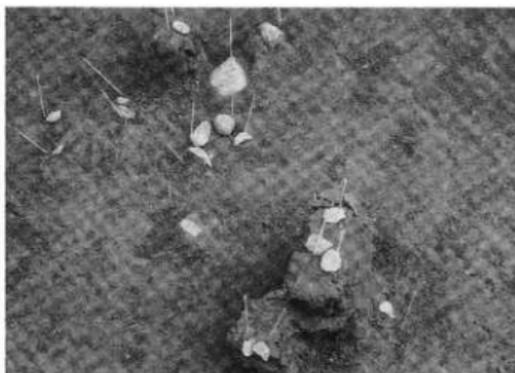


SK-32



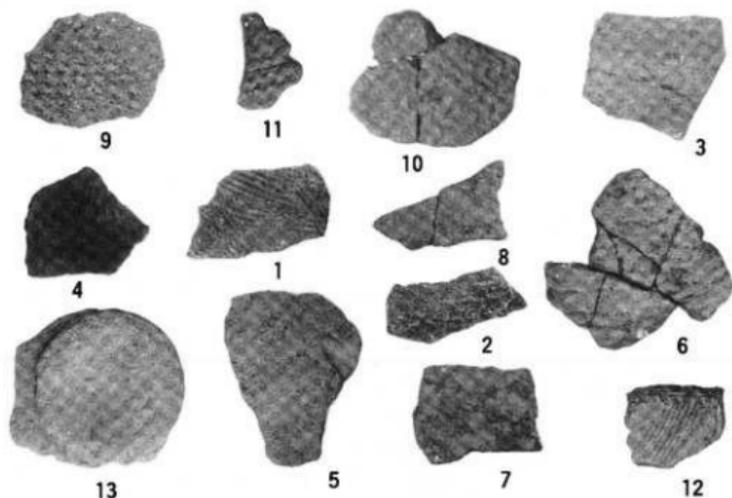
A区トレンチ  
遺物出土状況

A区トレンチ  
遺物出土状況

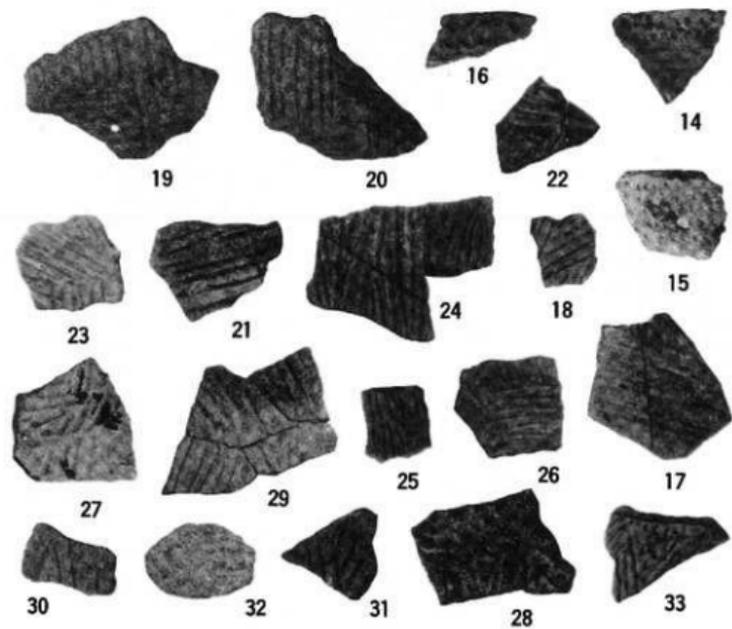


B区焼礫等  
出土状況

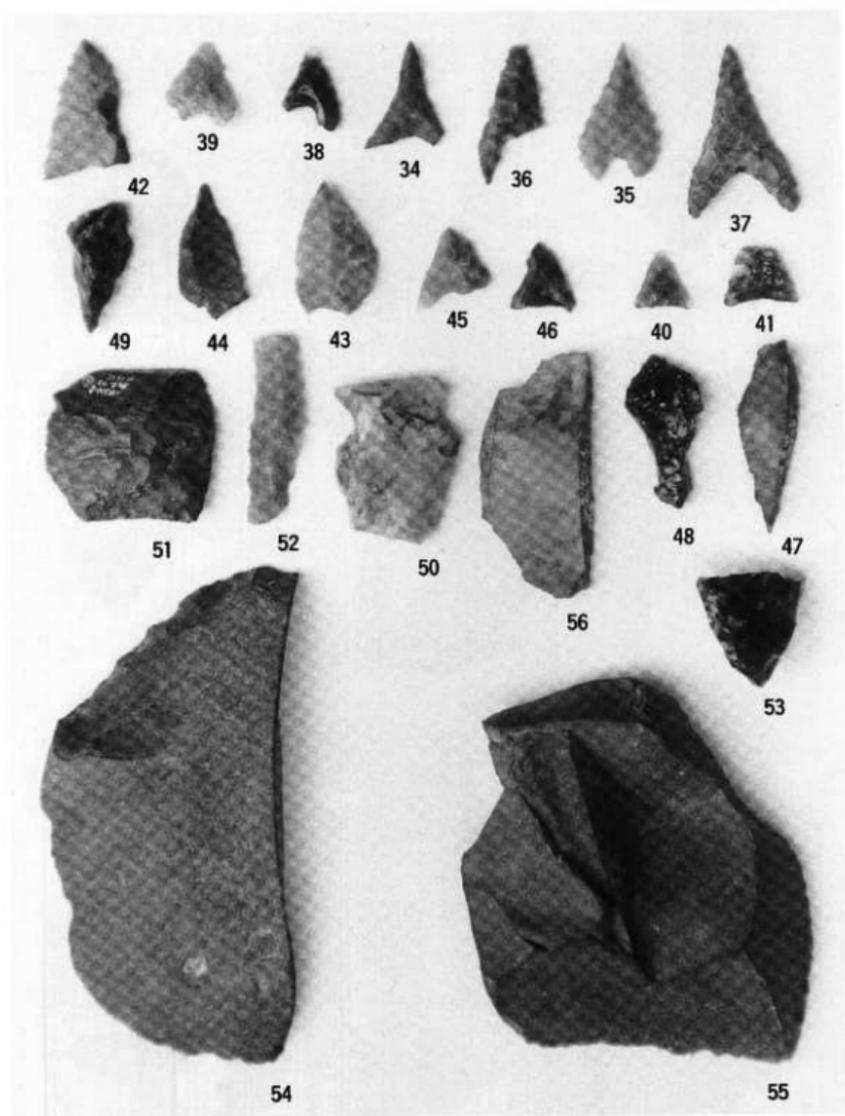




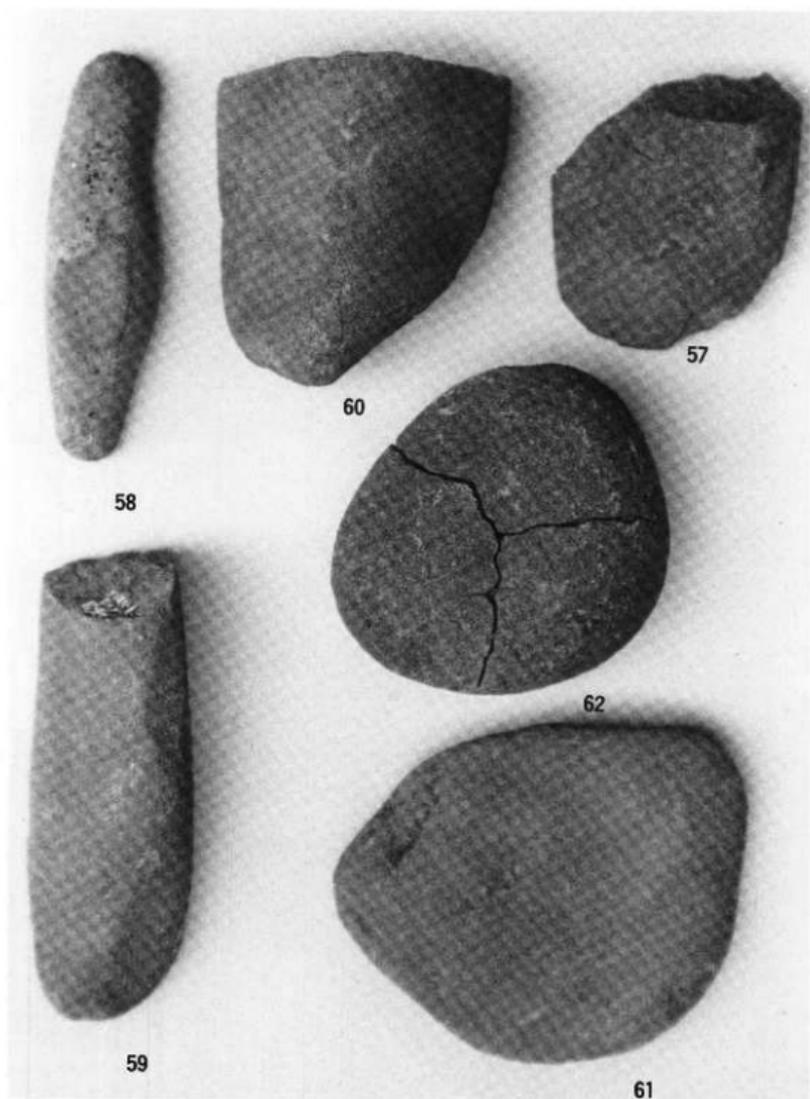
縄文時代早期の土器



縄文時代前期の土器



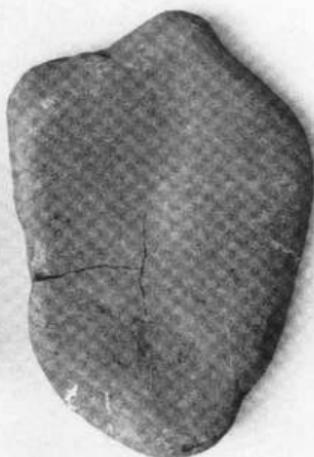
縄文時代の石器（石鏃ほか）



縄文時代の石器 (石斧ほか)



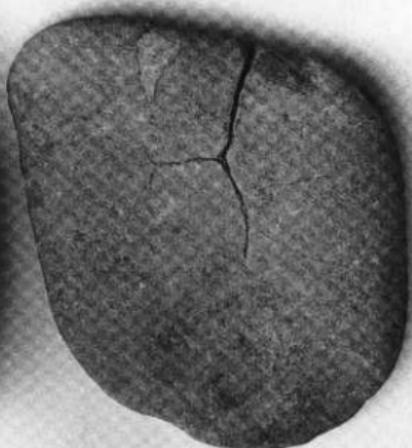
64



63

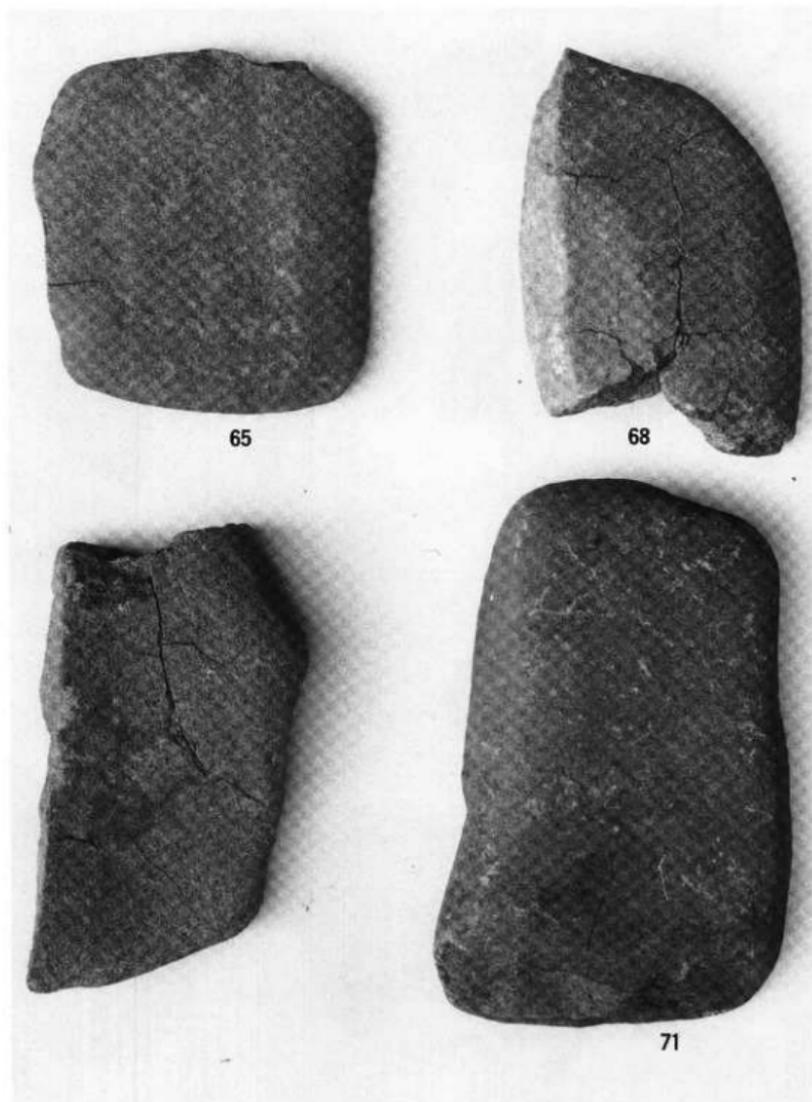


69

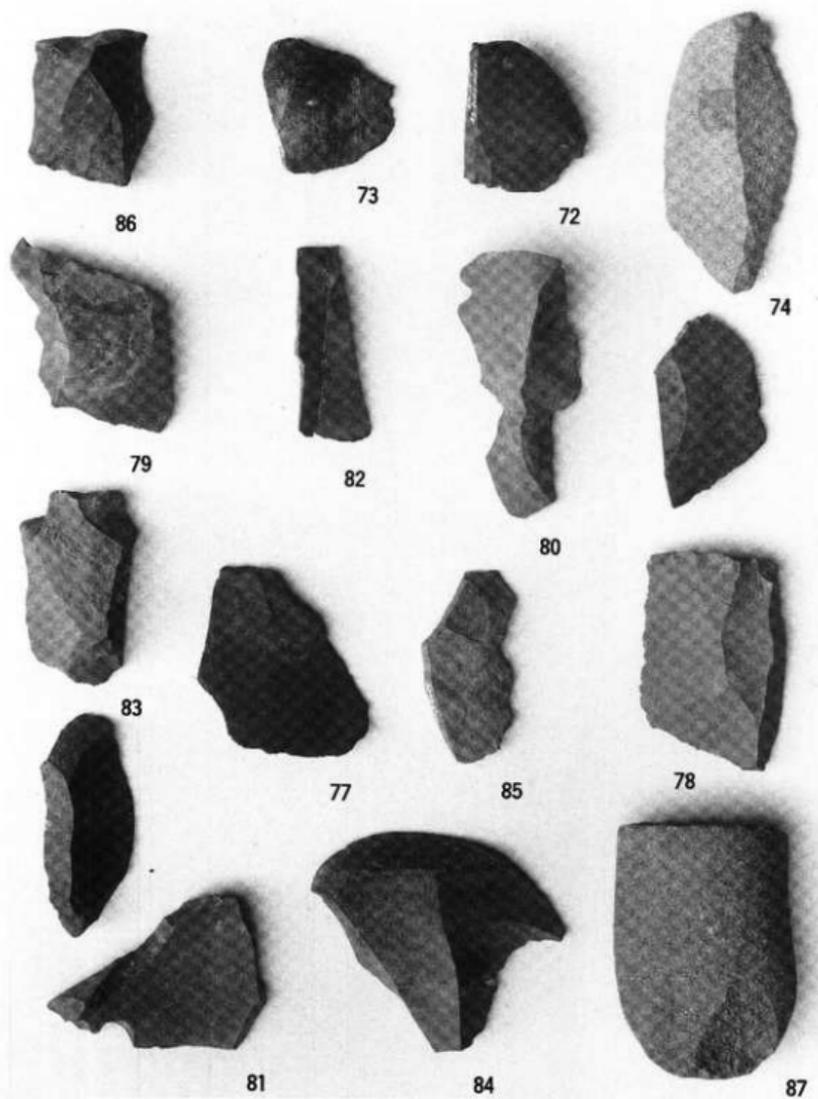


70

縄文時代の石器 (石皿)



縄文時代の石器 (石皿)



A区トレンチ第6層の出土遺物

田野町文化財調査報告書 第17集

長 藪 遺 跡

発行年月 1994年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 南印刷センタークロダ